

●炭焼き体験 再着火3月20日 空気遮断9日目(28日)

前回、昨年の炭焼き体験は燃えすぎて灰になっていたものがかなりあって、製品になったものは25箱でした。そして今年3月23日の着火は焚口の火が原木に届かずに失敗となりました。この教訓から焚口から出来るだけ燃えやすいシバ状の木材を天井にまで届くように詰め込んで着火が進みやすい形態に改めて着火を試みましたが、煙突からの煙の色はなかなか黒色に変化しなくて白色のままでした。また木酢液も通常よりかなり少なく9リットル程度の採取でした。これは原木が日陰で乾燥が激しく進んで水分蒸発が相当進んでいたからではないかと推測できます。排煙色も原木の水分が大変少なく色が変化しなかったのではないかと考えられます。排煙の温度も予想していたところまで待っていたのだけれど上昇しなくて待ちきれずに着火から9日目に空気遮断に踏み切りました。窯の温度は徐々に下がり始めています。昨年は炭窯開きを1年後に行ったのですが、今年は、窯の温度が低下すれば窯開きを行います。そして窯の維持と保全のために原木入り口と焚口を元通りに封鎖します。また周囲から水分がしみこまないように溝を掘るなどして、昨年以上に窯の保全への対策をすることにします。

出来上がりが気になりますので関心をお持ちの方など窯開きには多くの方のご参集をお願いいたします。

●国交省淀川河川事務所で木津川希少種植物調査管理業務完了検査、無事の通過承認される

深田理事長が急遽ご参加いただき、播川さん太田さん山村の4人が業務について完了検査を受けました。木津川希少種植物調査管理業務は京都府にレッドデータで指定されている植物で絶滅寸前種になっているものが多くあり、その保全と管理のための生育調査と除草作業をおこなった業務作業結果の報告を行うもので八幡市から木津川市小谷までの両岸24kmの堤防での作業結果を文章にまとめたものです。これで4年目なるのですが膨大な資料を整えるのが大変でした。この業務を受けることによって財政的な運営にゆとりが生まれ、里山の会が担っている木津川での希少植物の保全管理がされているのです。こういった業務は全国の一級河川では木津川だけだと誇れる取組だと思います。

●新年度の受注業務や共同作業の継続に責任をもって行こう

幾度もお知らせしてきましたが、国交省淀川河川事務所からの2021年度の木津川希少種植物調査管理業務や京都大学と協力作業である中聖牛設置作業への協力、また近畿建設協会への交付金申請業務、またトヨタ自動車へのイタセンパラの復活を目指す取組などは新年度の取組として継続申請を行っております。

新年度は高齢や体力の低下など諸条件の結果、役員としてお世話役を退くとお考えの場合、これらの事業には今まで以上の位置づけで事業推進にご協力をお願いしてまいりました。年度替わりの時期であり役員任期の時期でもありますので、ここはもうひと頑張りだと気を引き締めてご協力をお願い申し上げます。

●親子花見乗船体験

コロナウイルス感染防止のために親子花見乗船体験を昨年に引き続き中止せざるを得なくなりました。今年の桜は例年よりも早く満開の時期を迎え、早くも散り始めているようです。里山の会として最も華やかで楽しく愉快的な取り組みが開催できないのは、大変心苦しいのですが、地球規模

のパンデミックであり、クラスターの発生につながればそれこそ大変ですので、やむなく中止とさせていただきます。一時も早く落ち着くことを願っております。

4月10日に予定をしている「春の野草を食する会」は規模を縮小して里山農園での「野草を摘む会」として食事会を行わない形で開催します。万全を期し出来る限りの対策を取って進めたいと思っております。

●木津川植物花写真集の原稿できあがる 620 枚の写真と 466 頁

これまで何度も企画してきましたが、日の目を見ることがなかった取組です。ようやく原稿を整えることができました。数回発行直前までこぎつけてきましたが、今回は少々の間違ひはあっても発行することが肝心と全力を傾注してきました。出来上がりに問題が発見されてもこれまでご指導をいただいていた故村田源先生が強く発刊を希望されてきたもので、里山の会としてもこの時期を失ってはならないと決意をしています。

●ヤマトサンショウウオの卵嚢またまた産み付けられるこれまで最高 34 対となる

5年前から調査しており、一昨年24対見つけれられていたものが昨年には9対に減少して心配していましたが、今年は2週間ほど前には28対が見つかり、今週には合計34対になり、産卵したヤマトサンショウウオのメスが少なくとも34匹が生息しているのです。それに近い数のオスも生息していると考えられます素晴らしい出来事です。しかし、このことは簡単に喜べないのです。小さな池に34対もの卵嚢がひしめき合うこと、34匹ものメスがこの池に集中して産卵していることは、この近くに産卵できる場所がないということになっている証拠ではないでしょうか。考えさせられる出来事です。一つの卵嚢には少なくとも50個以上の卵が固まっています。まもなく50匹の幼生が生まれ、貧栄養の中で共食いが行われるとお聞きしています。

●竹蛇籠への工夫 シリーズ6回

そして約8mもある竹を、蛇籠を製作する作業現場への運搬は、これまた大ごとでした。予算も何もない中でのことだったので、友人のトラックをお願いして運びました。国道を通らないで、できるだけ通行の妨げにならないように農道を利用しました。

蛇籠づくりには、静岡からベテランの原小組さんの応援をいただいて、地域のみなさん100人規模で作業員を募集して、2日かかりで延べ200人の作業員で竹蛇籠を編みました。また竹蛇籠は3本一組で1基と考え「たわら積み」にするので下になる蛇籠を固定する杭を1基に10本打ち込みます。最初はカケヤでと段取りをしましたが、とても体力が持たず、ユンボの威力で打ち込んでいただきました。このことで2日目の夕方に計画していた蛇籠15本に栗石を投入出来て一応完成とすることができました。

